

第6章 形容詞の音便形

[本章の要旨]

音便形を異なる活用の型の間を示差性表示に利用した動詞に対して、対立する活用の型の違いを持たない形容詞は、活用形としての音便形の発達は遅くかつ不徹底であった。

第1節 先行研究と問題の所在

形容詞の音便形の成立については、従来次のようなことが指摘されている。

- (1) 連用形ウ音便と連体形イ音便は発生とその一般化^(注1)に時代差がある。
 - ①連用形ウ音便は平安時代中期(10世紀)以降一般化する。(桜井1966 a, b)
 - ②連体形イ音便は鎌倉時代初期(13世紀)以降一般化する。(桜井1966 a, b)
 - ③ただし、文献上の徴証から見ると、連体形イ音便の例の方が連用形ウ音便の例よりも早くから見られる。(築島1969)

- (2) 連用形ウ音便には、語によって音便化に遅速の差があり、その遅速の差は次のようである。
 - ①シク活用はク活用より音便化する率が高い。(桜井1965, 北原1967)
 - ②語幹末母音によって音便化に差がある。(語幹末母音 i > e > a > o > u の順で音便化率が高い)(北原1967, 甲斐1978)
 - ③語幹末母音に関わらず特定の語で早く音便化するものがある。(桜井1966 b, 築島1969, 甲斐1978)
 - ④書記者によって文献内部での音便化率に差が生じる。(甲斐1978)

- (3) 連体形イ音便には次の様な特徴が見られる。
 - ①平安初期の例としては「～コ(子。女性名)」「～コト」「～カナ」のように特定の語と結合する場合に音便形が見られる。(築島1969)
 - ②平安和文では連体法の場合に限られ、後接する体言は形式体言(コト、モノ、ヤウ、ホド)が多い。(木之下1958)

上に所説をまとめた形容詞の音便形に関する先行研究は、いずれもかなり以前に発表された研究で、その後の音便に関する研究の進展を踏まえた新しい研究は少ない。また、音便を論じた論考でも、形容詞の音便形についてはこれを「一般の」音便とは別物として、とりあえず考察の対象から外しているものが多く見られる。第5章では、動詞連用形における音便形の成立について、結合表示として生まれた音脱落(いわゆる音便)を四段活用

と上二段活用との形態の示差性を保障する活用形の差として動詞活用体系にとりこんだものとして解釈した。本章では、形容詞の音便形も動詞の音便形と同じように活用形としての成立と言えるかどうかについて考えていく。どちらかというとも別々に論じられることの多かった形容詞のイ音便とウ音便を併せて通史的に論じ、その活用形としての成立と役割について解釈を加える。この解釈は、動詞と異なり、連用形と連体形という二つの活用形に生じた形容詞音便形の、そのイ音便・ウ音便のそれぞれが互いに無関係に別個に生じたものなのか、あるいは、何か統一された機能をその形態の上に担うものとして生まれたのか、という考察を含むことになるであろう。

なお、本章では、形容詞のいわゆる本活用に生じた連用形ウ音便・連体形イ音便を考察の対象とし、いわゆる補助活用（カリ活用）に生じた連用形促音便・連体形撥音便は扱わない。後者の2音便形はラ変動詞に生じた音便形の問題として別に考えるべきものと思うからである。扱う時代的・方处的範囲は、音便の発生が認められる平安時代初期から一般化が完了したと思われる室町時代末期に至る京都中央語に限ることとする。

第2節 一語化の遅速と音便発生の遅速

前節にまとめたように、形容詞の連用形ウ音便と連体形イ音便は、その発生と一般化に遅速の差（発生は連体形が早く、連用形が遅れ、一般化は連用形が早く、連体形が遅れる）があるとされている。

桜井茂治は、その一連の研究（桜井1965, 1966a, 1966b等）において、古代日本語の形容詞の持つアクセントの在り方から、形容詞の場合、語幹と活用語尾との結合（＝一語化）が動詞よりも遅く、その中でも連用形ク語尾の方が、連体形キ語尾よりも語幹との結合（＝一語化）が比較的早かった、とする。そして、この事実と、形容詞の音便形の一般化が、連用形で早く、連体形で遅い事実、更には、連用形ウ音便化率が、シク活用で高く、ク活用で低い事実と結び付け、

連用形ウ音便は、「語幹と語尾の形態としての結合とその緊密化」（桜井1966b）を要因として、まずシク活用における語尾シとクとの結合から発生し、ク活用にも及んだ。

と結論づけた。

それでは、連用形語尾クが連体形語尾キよりもなぜ早く一語化したのだろうか？その問題は、必然的に形容詞の成立論に関わってくる。例えば、川端1997のように形容詞連体形そのものを連用形から生まれたものと見るならば、「一語化の遅速」もまた当然連用形語尾クが連体形語尾キよりも早いこととなる。ただし、本章では形容詞そのものの成立論（形容詞語幹及びそれぞれの語尾の起源論、活用自体の成立論）には音便形の成立に絡んで触れるに止め、詳しくは立ち入らないこととしたい。形容詞の成立論にはこれまた多くの先行研究があり、それぞれに原則的・方法論的な検討が必要であるが、本章ではそこま

での準備が整わない。したがって、本章では次のような事実を指摘するにとどめる。

すなわち、連用形語尾クが語幹と一語化するとは、副詞的に連用修飾するためにはク語尾が義務的 (compulsory) に付かざるを得なくなったということである。そもそも、形容詞語幹は、連用修飾の場合も連体修飾の場合も次のような直接修飾が行われていた。

連用修飾…タカユク (高行く) ・フトシク (太敷く) 等

連体修飾…オホウミ (大海) ・タカヤマ (高山) 等

しかし、動詞を直接修飾するような連用修飾用法は比較的早く廃れ、連用形語尾クを必要とするようになっていったと思われる。上代の文献においても、語幹による直接連用修飾は、連体修飾の語例よりも数が少ないようで、シク活用語幹による直接連用修飾例は見当たらない。また、直接連用修飾から生まれた語で後世まで残る語は、チカツク (近着く・近付く) ・トホザカル (遠離る) のように、早くから連濁して複合動詞として一語化しているものが多い。山崎1992は次のように言う。

…この語幹による連用法は、平安時代にはほとんどその影をひそめ、生産力を失ふに至るのであつて、現代語における「近づく」「遠離(ざか)る」「高鳴る」などの複合語は、その化石的な残存と見てよからう。語幹による連用法はシク活用の形容詞については文献に残らず、存在する余地がなかつたやうである。これはク活用形容詞の語幹がはやく連用形語尾「く」を伴つて活動するやうになり、後進性のシク活用がその影響を受けて比較的はやく語幹に「く」語尾を伴ひ、連用形を成立させたことによるかと考へられる。
(p. 70~71)

連用修飾に対して連体修飾の場合は、語幹による直接修飾(オホウミ・タカヤマ)とキ語尾を伴う(つまり、連体形による)修飾(オホキウミ・タカキヤマ)がこれ以後も長く併存していったのである。もちろん、オホウミ・タカヤマのような語は、かなり早い段階から、生きた連体修飾というよりも、要するに複合名詞としてとらえられていたであろうが、このような複合名詞は、「早起き・早食い・遠っ走り・長話し・…」等々、中世・近世以後さらには「長電話・早弁」のように現代に至るまでその造語力を失っていない。

以上のように見てくると、上代以前、独立性の強い形容詞語幹が用言をも体言をも直接修飾していたが、まず用言を修飾する場合から語幹の独立性が失われ、連用修飾することを明示する活用語尾クが義務的に膠着するようになっていった。そのため語幹と連用形語尾クの一語化は早く急速に進んだと見られるが、連体修飾を明示する連体形語尾キの方は、語幹による直接修飾が生産力を持って残存したので、その分語幹と連体形語尾キの一語化も緩やかな進展をたどったものと思われる。したがって、桜井が言う連用形・連体形の一語化の遅速の差は首肯さるべきものであろう。しかし、これが音便形の発生の遅速、ひいては音便形の一般化の遅速の真の要因であるかどうかは別に検討を要する問題である。次節以下に各活用形における音便の発生と一般化について論ずる。

第3節 連用形ウ音便の発生

形容詞連用形におけるウ音便の発生を説明する考え方には、従来、

①活用語尾となる接辞クと「語幹」との結合を表示するものとする説

②語幹末母音との連続による自然な発音推移によるものとする説

の二つの考え方がある。

①の説は前節で紹介した桜井茂治の一連の研究がとる説で（桜井1965, 1966a, 1966b等）、桜井は、連用形ウ音便は、形容詞語幹と活用語尾クが一語化したことの現われ、つまり語幹と語尾との結合表示とするのである。

②の説は北原保雄が唱えたものである。北原1967は、語幹末母音と語尾の音便化率の関連に着目し、平安和文文献中の音便形の出現率が、語幹末母音が $i > e > a > o > u$ の順で高くなることから、活用語尾クの直前の語幹末母音が前舌母音であるほど良く音便化するとした（当初、北原1967では $i > a > e \cdot o > u$ の順としていたが、甲斐1978は北原1967の数値の誤りを指摘して、 $i > e > a > o > u$ の順とした。なお、語幹末母音が i の形容詞とは即ちシク活用形容詞であり、ク活用形容詞に語幹末母音 i の形容詞は実質上ない（北原1967, 1968）。そして、北原1967は、

平安和文文献内部の音便出現率の大小が、すなわち音便発生の順序を反映するものであり、音便の発生もこの語幹末母音の順に発音運動の自然の推移という方向で進められたもの

とした。

着実な事実に基づく北原1967の結論であるが、次のような方法論上の疑問は残る。即ち、平安時代和文文献内部の連用形ウ音便化率が語幹末母音 $i > e > a > o > u$ の順に並ぶという共時論的事実が、 $i > e > a > o > u$ の順に音便化が進行したという通時論的解釈を許すものなのかどうか、という点である。例えば、同じ和文資料でも成立ないし書写が後の時代のものほど語幹末母音による差が縮小しているというような事実があるなら、この語幹末母音による音便化率の順が音便化進行の順を反映しているという解釈も許されるであろうが、そのような数値の動きははっきりと出てこないようである。だとすれば、この順を素直に解釈するならば、許される解釈は、音便形と非音便形が「ゆれ」ている平安和文において音便形が出てきやすい形容詞と出てきにくい形容詞があって、その出てきやすさ（あるいは、出てにくさ）を示す順であるという共時論的解釈までであろう。

事実として確かに②の北原説のように、平安和文資料において上のような音便化率の分布が見られるものの、他の諸論考により音便化率に関わる下のような別の要因も指摘されている。

(a) 語によって早く音便化するものがある。（桜井1966b, 甲斐1978, 築島1969）

例えば、副詞的に用いられるイタク～イタウ（甚）は、語幹末母音アのク活用形容詞にしては高い率で音便化する。

(b) 書記者によって文献内部での音便化率に差が生じる。（甲斐1978）

例えば、『源氏物語』柏木の巻は、特に高い音便化率を示す。

上のような指摘も考慮に入れるならば、単に音韻環境によってウ音便が発生・進展したものとすることに躊躇を感じざるを得ない。また、北原1967の説は、いわば連用形ウ音便の一般化がどのような道筋で進んだものかを予測したものであり、なぜ形容詞連用形という枠組みでまさに音便が生まれたかという根本動因を説明しようとしたものではない、とも言えよう。音便化の流れを水の流れにたとえるならば、水門を開けて水を流し出したところの根本動因に対し、北原の自然な発音推移説は、低きに向かって流れるその水の流れ行く道筋を示したものと言える。（その意味で、一語化による語幹と語尾の結合表示という根本動因を想定する桜井説と北原説は、必ずしも対立する説とは言えない。）

平安時代の和文資料を見ると、連用形ウ音便は、その連用形の職能の種類（副詞法、連用中止法、接続法、条件法等）とは関わりなく起こっている。この事実を見ると、そのウ音便の発生の契機も、動詞連用形の音便に見るような、その語と後続付属語類との結合表示ではなく、あるいは桜井の言う形容詞語幹と連用形語尾ク自身との結合表示として生まれたものと解釈されるべきかもしれない。

しかし、連用形ウ音便が、仮に桜井説のように形容詞語幹と連用形語尾クの結合表示として生まれたものとしても、平安時代和文において（そして後の時代の擬古的和文においても）表記上音便形で表記されるか非音便形で表記されるかが〈ゆれ〉として残ることが何を意味するのか、不思議に思われる。また、連体形イ音便もまた形容詞語幹と連体形語尾キの結合（＝一語化）表示と考えられるのかどうかも、連体形イ音便化例が後述のように平安初期から見えていることからして、疑問が残るのである。

形容詞連用形ウ音便がどのような場合から見られ始めるか、和文資料を離れて訓点資料を見ると、和文資料には見られない傾向が存在する。大坪1981、築島1963, 1969, 1987などによると、連用形ウ音便は、下例のように動詞スに続く場合から現われ始めると言う。

深微 クハシウス（周易抄 900年頃）

正 タトシウス（漢書楊雄伝 950年頃）

次のような接続助詞シテに続く場合も早くから見られるが、これも動詞スに続く場合と同じものとして考えられる。

貧 マツシウして（守護国界主陀羅尼經平安初中期点 900年頃）

超 トホウシテ（漢書楊雄伝 950年頃）

このようなサ変動詞との結合表示とも見られるウ音便は、比較的初期の和文資料にも見られる。

から（辛）うして（竹取物語、伊勢物語）

かな（可愛）しうし給ひけり（伊勢物語）

こういった特定の後接要素との結合による音便化の傾向は、音便化の要因が、語幹末母音との関係による自然な音脱落といったものですまされないことを示唆するであろう。また、このような音便を結合表示の機能を担ったものとして見ても、語尾クとそれに前接する語

幹との結合（＝一語化）を示すのではなく、形容詞とサ変動詞の結合、すなわち、一種のサ変動詞化を表示しているものと考えerほうが適当であろう。こう見ると、形容詞ウ音便も、形容詞以外に見られる他の多くの初期音便と同じように、複合する二要素のその前部要素末尾に生じた結合表示のための音変化と見てさしつかえないこととなるのである。そして、形容詞ウ音便形の一般化は、この結合表示として生まれたウ音便形が何らかの要因によって活用形そのものへと向かっていったものと考えられ、これは第5章で筆者が述べた動詞音便形の活用形としての成立の流れと基本的には軌を一にする動きと言えよう。

第4節 連用形ウ音便形の一般化と連用形原形の残存

しかし、形容詞ウ音便形の一般化を、動詞音便形の活用形としての成立（＝一般化）と全く同様のものとする見方を許さない事実がある。それは、連用形ウ音便の一般化が不徹底であることである。後世に至っても、「Aは～く、Bは～い」のような対比的な表現における連用中止法、「～くは」の条件法などに連用形非音便形が残る。

例を中世末期の代表的な口語資料である『キリシタン版エソボ物語』にとって見ると、基本的な用法、即ち、連用修飾法に立つ形容詞連用形及び接続助詞テを伴う接続法で音便形が専用され、用例数から言えば音便形の方が多いのだが、次のような場合に原形の使用例が見られる。

〔対句的表現における連用中止法〕

- ・総じて下臆なうて、上臆なく、無能な者がなうては、能者の立つこともない。
(p. 464)
- ・互の一味をもって人間の中も強く、また不和な時は、国家も滅びやすいという儀ぢゃ。
(p. 492)
- ・才知よく、芸他よに勝たくられた仁体を、(p. 492)
- ・また角つの物見なこと、世にたとうものもなく、元より走らせらるるに速いことも、世に並びがないと見及うでござれども、(p. 493)

〔～クハの条件法〕

- ・もしその願みがなくは、たちまち気に違い、(p. 449)
- ・志が浅くは、なぜにこれまでは参らうぞ？(p. 456)

〔～トモの逆接条件法〕

- ・「これは当時重くとも、やがて軽くなるものぢゃ」と思うて、(p. 413)
- ・一人づつの力は弱くとも、互いに入魂じゅうこんし、志を合わするにおいては、(p. 492)

〔～モの副詞的用法〕

- ・忝くも御身近う召し置かせられた。(p. 432)

〔副詞的に用いられる特殊な形容詞〕

- ・まづゲレシヤの国に行いいて、諸人に道を教え、同じくその国の中ちなデルホスとい

う島へ渡り、(p. 441)

ロドリゲス『日本大文典』を見ると、彼の言う「語尾がアイ・エイ・イイ・オイ・ウイに終わる形容動詞」、即ち我々の言う形容詞の、種々の時制・法・接続表現に触れている所で、原形語尾クを書き言葉に用いられるものとし、連用形音便形の方を基本的な語幹として提示し、音便形を通常形として形容詞の種々の表現を説明・例示している。しかし、次の2箇所では、原形の形でその用例を示している(土井忠生訳同書p. 191~206)。

○日本語及び葡萄牙語に固有な別の接続法

○現在

… Fucaqutomo (深くとも)。 … (p. 197)

○条件的接続法の現在

Fucaquua (深くは)。Eucaqumba (深くんば)。 … (p. 198)

動詞音便形の場合は、音便形と非音便形との併存の時期を経て、次第に音便形はテ、タ(タリ)に続く場合に局限され、四(五)段活用動詞連用形内部で音便形と非音便形との機能分担を完成させる。その観点から見れば、上に見るような原形の残存を形容詞連用形における音便形と非音便形との機能分担への動きと見ることもできよう。特にロドリゲスが原形で示している条件表現の場合は、それが使われる文体や語調の違いに関わりなく音便形の使用が文法として排除されているように見える。〔なお、~クハ(~クンバ)、~クトモのような条件表現に使われる~クを未然形として連用形とは別な活用形として立てる立場もあるが、歴史的に見ればこのクが連用形語尾であることは周知の事実であろうから、機能分担の有無を連用形原形と音便形の間の問題として論ずることに差し支えはないだろう。〕

しかし、上の『キリシタン版エソボ物語』に見られる、原形が使われる用法の中、〔対句的表現における連用中止法〕は、次のように音便形も同じ数ほど使われているのが見られる。

- ・総別女は弱いによって、悪には入りやすう、善には到り難いぞ。(p. 438)
- ・上一人より下万民の頭上を踏むに恐れもなう、何たるよい酒、珍しい肴というても、いづれか我らが手を掛けぬを食する人のある？(p. 457)
- ・家も広う、間々**も多いを見て、(p. 473)
- ・恩を忘るる者は多う、仇を報ぜぬ者は稀な。(p. 500)

結局この連用中止法における原形と音便形は、明確な文法的機能分担ではなく、発話者によっていったんそこで発話が断止されるその語調の強弱を反映する程度の緩い使い分けによるのであろう。

以上のように連用形ウ音便形は、完全に非音便形(原形)を駆逐して活用形化するまでに至っていない。音便形と非音便形(原形)との機能分担も動詞のようにはっきりしていない。このことを押さえた上で今度は連体形イ音便について検討する。

第5節 連体形イ音便の発生と一般化

連体形イ音便は、連用形ウ音便に比べて一般化するの遅れる（連用形ウ音便は平安中期〔10世紀〕以降一般化したと考えられるのに対し、連体形イ音便は鎌倉初期〔13世紀〕以降と考えられる）が、発生そのものは連体形イ音便が連用形ウ音便より早く認められることが報告されている（築島1969等）。

平安中期以前の連体形イ音便の用例は、次の四つのケースに集中する（具体的な用例は岡崎1979に詳しい）。

（形式名詞を後接して体言化）

トキコト>トイコト ナキコト>ナイコト 等

（複合して一語化し品詞転成）

ホシキママ>ホシイママ ナキガシロ>ナイガシロ 等

（「子」を後接して女性名を表す）

タカキコ>タカイコ キヨキコ>キヨイコ 等

（終助詞カナを後接）

ヨキカナ>ヨイカナ カナシキカナ>（カナシイカナ>）カナシカナ^(註2) 等

これらはいずれも、単に〔形容詞の意味によって修飾限定された名詞の意味〕を持つだけのものではなく、緊密に後接要素と結び付いて何らかの意味・職能の特殊化を伴うものであると考えられる。即ち、連体形のイ音便は、当初語の結合による一語化（複合名詞化・体言化）表示として生まれたと考えられるのである。^(註3)

連体形活用語尾がなせキ（上代ではキ甲類）の形になるのかは本章の考察の範囲外のことであるが、このキの音節は、ツキガキ>ツイガキ、ツキタチ>ツイタチ、カキテ>カイト、カキタマフ>カイトマフのようなーキー>ーイーの音韻変化のパターンに乗って、言うならば、結合表示の職能を持ったイ音便の生まれやすい形態であったと言えよう。

そもそも、第2節で触れたように、上代文献においては、連用修飾・連体修飾それぞれに次のような二様の型が見られる。

（語幹直接修飾）

高行く、高山、太敷く、太柱…連体・連用無表示

（有語尾修飾）

高ク行く、太ク敷く…連用表示

高キ山、太キ柱 …連体表示

連体形においては、ここにイ音便形が生じることによって、形容詞（形容言）と名詞との結合には次の三種の型が存したこととなる。

語幹直接修飾（高山）⇔有語尾原形修飾（高き山）⇔有語尾音便形修飾（高い子）
そしてそれぞれの結合度の強弱は次のようである。

語幹直接修飾（高山）⇔有語尾音便形修飾（高い子）⇔有語尾原形修飾（高き山）

(結合度) 強 ⇔ 中 ⇔ 弱

この音便形と非音便形が示す結合度の差は、修飾する形容詞と修飾される名詞との結合度であり、形容詞語幹と語尾自身の結合度の差ではない。

平安時代以降、この連体形の音便形が、限られた複合語から通常の形容詞連体修飾へ拡大されていったのであるが、木之下1958によると、平安中期以降の和文文献においては、連体形イ音便例はそもそも数が少なく、出現する場合、名詞または終助詞カナを後接する例に限られるという。ただし、終助詞カナに続くのは形容詞型助動詞ベシの例（～ベイカナ）に限られるので、本来の形容詞としては連体修飾の場合に限られることとなる。これは複合名詞化を表示する初期音便形から、連体形（中世以降終止連体形）活用形としてより自由な位置に立つようになるまでの過渡的な状態を示すものと言えよう。

木之下1958は、談話語において一まとまりに発音される「話節」という単位を設定し、複合語において生まれた連体形イ音便が、話節内の、意味的には複合していない連体修飾にも用いられるようになり、さらに後接体言の独立性が相対的にイ音便形容詞をも独立的に意識させ、イ音便が話節から独立して自由に使われるようになったものとする。

ただし、そのような連体形イ音便の一般化は文献上は連用形ウ音便よりも遅れる。院政・鎌倉時代の文献（例えば今昔物語集や平家物語）でも、連体形イ音便例は多くない。しかし、室町時代の口語的文献（抄物・狂言台本・キリシタン資料）では既に音便形が終止連体形として一般化している様子が見られるのである。

山崎1992は次のように記す。

形容詞におけるこの四種の音便（坪井注：連用形ウ音便・連体形イ音便・カリ活用連用形促音便・カリ活用連体形撥音便、の四種）のうち、連体形のイ音便はしだいに勢力を伸ばして、本来の語尾「き」を凌ぐやうになり、室町時代には終止形語尾にも大きな影響を及ぼすに至った。すなはち、ク活用の終止形語尾「し」を同化して「い」とし、シク活用の終止形にも付着して、ク活用・シク活用ともに終止形・連体形の語尾を「い」としたのである。本来終止形に根本的な相違のあつた二種の活用は、かうしてその終止形が同形となるに及んで分立の意義を失ひ、ついに口語文法の形容詞における一種類の活用を形成して、語尾「い」は近代語・現代語の中に活用形として定着したのであつた。
(p. 85～86)

引用文中、語尾イが終止形語尾シを「同化」するとか、シク活用の終止形に「付着」するなどという部分、用語の使い方に疑問を感じることが、室町時代に音便形が活用形として定着したのは事実であろう。

第6節 形容詞における「活用形としての」音便形

前節まで先学の諸論考に導かれておおまかな流れを祖述し、所々に問題点を指摘してきたが、ここで筆者の立場から形容詞音便形の発生から一般化に至るまでをまとめてみたい。

なお、筆者の音便に対する基本的な考え方は第4・5章で述べているので、詳述は避けるが、要点を簡条書きの形で以下に示しておく。

- (a) 音便とは接続する二つの語が意味的・機能的にひとまとまりとなっていることを形態上に表したものである。
- (b) 音声言語の上で二つの語の結合部の音節が弱く一続きに発音されることが音便化の始まりであるが、発音の弱化の発生が常に語形として「音便形」を生むわけではない。原形との意味上・機能上・文体上の違いが意識されて、弱化された音節が元の音節と異なる異質な音節に捉え直されて初めて音便形と呼ばれる語形が確立し、文献上でもしかるべき形で表記される。
- (c) 弱化した結合部の音節を、元の音節との有縁性と異質性との矛盾的合一のもとにどのような音節に仕立て直すかについて、いわゆるイ音便・ウ音便・促音便・撥音便の四つの型が成立した。
- (d) 語形として確立した音便形は、当初原形と共存し、やはりその原形との有縁性と異質性によって意味上・機能上・文体上の違いを表す。
- (e) しかし、音便が発生するメカニズムと、いったん音便形が確立して以降、言語体系の中でどのような機能が付与されていくかは別な事柄であり、音便形の中には原形との共存を廃し、発生時とは全く別な意味・機能を担っていくものがある。(例えば第5章で論じた動詞音便形がその例である。)

さて、上のような基本的観点から、まず第一に形容詞音便形の発生について見ると、連用形ウ音便も連体形イ音便も、その文献に現われ始める用例は後接語との密接な結合を表示する例が認められる。こう言うと、その発生について、連体形イ音便はともかく、連用形ウ音便が後接語との密接な結合を表示する例から生まれたと言えるかどうか疑問もあるであろう。しかし、筆者は第3節で見たように訓点資料においてサ変動詞スを後接する場合に多く音便例が見られる事実を重視したい。和文資料では、そもそも「形容詞連用形＋ス(～シテ)」の語法があまり使われないことも関係するであろうが、音便形の出現が特定の結合形式に偏るという事実は認めがたい。しかし、一般的に訓点資料が和文資料よりやや古い日本語の状況を伝えることの多いことから、連用形ウ音便はサ変動詞との結合表示として最初に現われ、その後急速に連用形の他の用法にも広まっていったものと見るのである。

次に、同じ結合表示として生まれながら、連体形イ音便の方が連用形ウ音便より早く文献上に見られるという指摘であるが、これはやはり連体形イ音便の方が音便形として早く安定したと言っていいのではなかろうか。第5節で指摘したように、連体形語尾原形はキという音節であるために、キ>イの音変化の型(この音変化の型は平安時代初期に広く見られ、亀井1980の言う「流産した音則」と呼べるほどのものであった)に則るものであった。このことが結合部キの弱化した発音を母音イとして安定させる要因となっていたであろう。四段動詞連用形に生じた音便もカ行・ガ行動詞のイ音便から文献上に現われ始める

のである。

発生は連体形イ音便の方が早いと見られるにも関わらず、その一般化は連用形ウ音便の方が早く進んだのはなぜだろうか。平安時代和文文献において連用形原形とウ音便形は《ゆれ》としか言いようがない現われ方をする。シク活用とク活用、ないし語幹末母音の違いによってその《ゆれ》の有り様に違いがあるにしろ、具体的に和文文献上なぜここで音便形になっていてあそこでは原形なのか⁽⁹⁴⁾という理由は、確言し難い現われ方をしてるのである。さきほど「連用形ウ音便はサ変動詞との結合表示として最初に現われ、その後急速に連用形の他の用法にも広まっていった」と述べた。しかし、これは事実をそのまま述べただけのことであり、ただちに「それはなぜか？」という疑問を生じる。サ変動詞との結合表示としての連用形ウ音便が、結合表示など必要の無い連用形のあらゆる場合に、なぜ誘発されていったのだろうか。

思うに、形容詞連用形語尾のクは、そもそも一般的に音声言語の上で弱く曖昧に発音される傾向があったのだろう（アクセント上も低いアクセントで発音されていた）。kuという音節は子音も母音も口の開きが小さく聴覚的印象も弱い音節である。ただ、上に箇条書きにした音便に関する基本的な観点でも記したように、発音が弱化したからといって必ずしも語形として音便形が生まれる必然性はないはずである。形容詞連用形においては、この必ずしも必要でない音便形を、弱化した発音のままに表記するという慣用を生じたのである。サ変動詞との結合表示としての連用形ウ音便は、弱化したクの音節を母音音節ウとして仕立て直す型を提供した。そしてその限りにおいてこのウ音便形が連用形の他の一般の用法にも「広がった」と言うことができる。平安和文文献において形容詞連用形が原形と音便形で《ゆれ》ていること、両形の間には明確な意味上・機能上・文体上の差異が見られないという事実は、いささか逆説的な言い方であるが次のように言うことができる。連用形語尾は、結合・非結合という文法的機能とは無縁であるからこそ、クという、子音も母音も「暗い」音節のその特性のままに、弱化した一拍分の音節をウともとらえ、原形と音便形との《ゆれ》として存在したのである、と。

連用形ウ音便の発生を、形容詞語幹と語尾ク自身の結合表示と見る見方には疑問を感じる。この考え方は、アクセント資料から見て形容詞語幹と語尾の一語化が連用形で早く進み、連体形では平安末期以降に一語化が遅れたという見方に立っている。しかし、既に見たように連用形ウ音便・連体形イ音便ともに初期の例は語幹と語尾自身ではなく、形容詞と後接する語との結合を表示していると考えられ、そもそも連体形イ音便の例は平安時代初期から見られるのである。

連用形ウ音便に反して連体形イ音便は、原形による一般的な連体修飾と音便形による結合表示という両形が担う文法的機能が存続し続けた（例えば、平安和文を通じてシロイモノはシロキモノと異なる一語化・意味の特殊化を表している）。したがって、例え音声言語で連体形語尾が弱化した発音で発音されたとしても、書記言語上に「語形」としてイ音便形が通常の連体修飾の場合に現れるのは、連用形に比してまれであり続けたのである。

ただし、連体形の場合、後接する名詞と密接な結合を作る方法に語幹による直接修飾法が生き続けたために、有語尾原形と音便形との結合表示の機能分担がそれほど明確でない点もあったであろう。

連体形イ音便の一般化は、音声言語では平安・鎌倉時代を通じて進行していたのではないかと想像されるが、上に述べたように原形と音便形との機能分担が一応保持されたために文献上一般の連体形にイ音便が現れることに抵抗があったと言える。しかし、室町時代の口語的文献に至り、文献上も連体形イ音便形がすっかり一般化している様相を示す。後接名詞との緊密な結合による複合名詞化は、形容詞語幹と名詞との結合に限られるようになり、音便形が結合度の相対的な強弱表示の機能から解放され、通常の形容詞連体形一般の機能を担うようになった。このような文献上に現れる急激な変化は、終止形連体形の合流（の文献上での完成）によるところが大きいと思われる。終止形連体形の合流によって終止形語尾シが消え、従来ク・シ・キ・ケレという形態的には寄せ集め的で不統一だった形容詞の活用形式が、急速にウ・イの母音音節に統一された（部分的に已然形のケレは残存するし、この「統一」が京畿中央語に限られることは言うまでもない）。

連用形	終止形	連体形
～ク	～シ	～キ
↓	↓	↓
～ウ	～イ	～イ

これが形容詞における一応の《活用形としての音便形》の成立と言えよう。

以上、大きな流れとして見れば、結合表示の役割を担って発生した音便形を型として、音便形と原形との併存を経て、音便形自身が活用形として成立する、という動きが京畿中央語における形容詞音便形の歴史であり、その点において四段動詞連用形に生じた音便形と同じ動きを見せるものと言える。しかし、形容詞音便形の活用形としての成立は不徹底であった。しかも、連体形よりも早く音便形の一般化が進んだと思われる連用形において原形の使用が音便形とゆるる形で最後まで残ったのである。連用形において音便形の一般化が不徹底だった理由には、補助活用であるカリ活用の存在があったであろう。種々の助動詞類を後接するために必要であったカリ活用は、「連用形ク＋アリ（アル）」の構成意識を存続させ続けたために、「連用形ク」も形容詞の活用パラダイムから消し去るわけにいかなかったからである。また、動詞連用形における音便形が四段活用動詞と上二段活用動詞の形態の示差性を保障する役割を持って活用形化したのに対し、動詞のような活用の型の違いを持たない形容詞においては、音便形がそのような役割を担う必要性はもとよりなかったのである。

〈第6章・注〉

(1) ここで言う「一般化」とは、それぞれの活用形において、音便形の方が原形よりも広く用いられるようになることを指す。

(2) 訓点資料において、アヤシ(怪)、カナシ(悲)が終助詞カナに続く時、アヤシカナ、カナシカナとなる例が見られ、大坪1981は、これをアヤシイカナ、カナシイカナのイが縮約されたものとしている。

(3) 終助詞は通常体言とは言えないが、木之下1958は、「カナは結合関係では形式名詞に近かつたであろう」として他の体言結合と同質のものとしている。

(4) 例えば、

・霜枯れの草、むらむらにをかしく見え渡るに(源氏物語絵巻・関屋)

の非音便形と

・夕映えをかしう見ゆ(同・竹河)

の音便形と、なぜ前者が非音便形で後者が音便形でなければならないか、という理由を ad hoc なこじつけでなく述べることは困難であろう。

〈第6章・参照文献〉

- 大坪1981 大坪併治『平安時代における訓点語の文法』 風間書房 昭和56年8月〔第4章 形容詞〕
- 甲斐1978 甲斐睦朗「青表紙本源氏物語における形容詞連用形のウ音便について—その表現への志向—」 『国語国文』第47巻8号 昭和53年8月
- 亀井1980 亀井孝「《一キ(一) > 一イ(一)》のいすとうりあ(ものがたり)」 『国語国文』49巻1号 昭和55年1月 亀井孝論文集3『日本語のすがたところ(一)』(吉川弘文館1984) 所収
- 川端1997 川端善明『活用の研究』(増補再版) 清文堂 平成9年4月〔第二部活用の構造 第五章相の活用 第二節装定述語としての形容詞〕
- 木之下1958 木之下正雄「形容詞イ音便化の条件」 『国語国文』第27巻11号 昭和33年11月
- 北原1967 北原保雄「形容詞のウ音便—その分布から成立の過程をさぐる—」 『国語国文』第36巻8号 昭和42年8月
- 北原1968 北原保雄「形容詞「ヒキシ」攷—形容動詞「ヒキナリ」の確認—」 『国語国文』第37巻5号 昭和43年5月
- 桜井1965 桜井茂治「形容詞の活用形の成立について—とくにアクセント形態を中心として—」 『国学院雑誌』第66巻8号 昭和40年8月
- 桜井1966 a 桜井茂治「形容詞音便の一考察—源氏物語を中心として—」 『立教大学日本文学』第16号 昭和41年6月
- 桜井1966 b 桜井茂治「形容詞音便考—発生の要因—」 『国学院雑誌』第67巻10号 昭和41年10月
- 築島1963 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』 東京大学出版会 昭和38年3月〔第5章漢文訓読語の文法 第3節用言—動詞〕

- 築島1969 築島裕『平安時代語新論』 東京大学出版会 昭和44年6月
- 築島1987 築島裕『平安時代の国語』（国語学叢書3） 東京堂出版 昭和62年4月〔第3章音韻〕
- 山崎1992 山崎馨『形容詞助動詞の研究』（研究叢書107） 和泉書院 平成4年2月〔第4章形容詞の発達〕 *引用部分の初出は、『品詞別日本文法講座』第四巻形容詞・形容動詞「形容詞の発達」明治書院1973（昭和48）年3月